

豊田市民芸館だより



木綿地切伏刺繍衣裳（部分） 19世紀 日本民藝館蔵

目 次

- ・ビギニング・オブ「或る賞鑑家の眼－大久保裕司の蒐集品」展… 2頁
- ・我が師、大久保裕司について …………… 3頁
- ・特別展「アイヌの美しき手仕事」作品紹介 …………… 4.5頁
- ・民芸の森から …………… 6頁
- ・令和5年度事業報告 …………… 7頁
- ・民芸館からのお知らせ …………… 8頁

第37号

ビギニング・オブ「或る賞鑑家の眼—大久保裕司の蒐集品」展

今から3年前。私が豊田市民芸館で館長としての仕事をスタートさせて間もない頃のこと。民芸館が所蔵する資料について調べたいことがあり、膨大なコレクションの調書が並ぶ棚の前でひとつずつファイルを手に取り、目を通していました。そのとき、ほかのものとは異なる背表紙の付いた資料ファイルに目が止まったのです。私にとって初見のファイルで、背には「大久保コレクション」と見出しがついていました。それは日本の古い陶磁器をはじめ、ガラス、木工、金工、民間伝や小道具、朝鮮時代の諸工芸品から西洋アンティークまで、およそ330点の資料の写真と調書がまとめられたファイルだったのです。ほとんどが両の手に収まるほどの小さなものばかりですが、ものの選定に独自のこだわりが感じられ、しかも一つ一つの質が極めて高いのです。思わずそのファイルに収まる資料の豊かさに惹き込まれてしまいました。調べてみると、これらの資料は東京の故・大久保裕司氏が蒐集したコレクション（以後、大久保コレクション）で、数年前から当館に寄託されているものであることが明らかになりました。大久保裕司氏は、戦後復興期に東京で生まれ、平成の終わりに生涯を終えた古美術・骨董の蒐集家です。彼は青山二郎氏や秦秀雄氏、白洲正子氏等、骨董の世界の先達と交流した数少ない賞鑑家で、工芸雑誌『遊楽』や『小さな蕾』などで自身のコレクションを紹介する連載を執筆するなど、骨董界では名が通った人物です。大久保氏の確かな審美眼に裏打ちされた優れたコレクションは、古美術・骨董を取りあつかう蒐集家やギャラリーの間ではよく知られていたようです。それにしてもなぜこれほどまでの資料が当館に寄託されることになったのでしょうか。

これまでの経緯を知るため、大久保コレクションに関して当館への寄託の手続きを行なった椎名直行氏に連絡を取ってみました。椎名氏は大久保裕司氏唯一の弟子で、大久保氏のご遺族からコレクションの管理を任されている人物です。彼は大久保氏の膨大なコレクションが散逸することなくまとめて寄託できる公共の機関を懸命に探したと言います。その過程で椎名氏の大学時代の友人の郷里であった豊田市に民芸館があることを知り、資料の寄託を申し込んだということです。椎名氏は、古美術・骨董を愛でた豊田市名誉市民、本多静雄氏の功績もよく心得てお



り、その本多氏ゆかりの民芸館であることも寄託を申し込む上での決め手となったとのことでした。なんとという時の巡り合わせなのでしょう。またこのとき、椎名氏から新たな情報と提案をいただきました。それは、豊田市に寄託している資料群とは別に、大久保氏による重要な蒐集品を150点ほど保管していて、すべて貸し出しが可能な状態にあるということ。民芸館に寄託した資料とそれらを一堂に展示して、賞鑑家・大久保裕司氏の蒐集活動の精華を多くの方にご覧いただく機会を設けることはできないだろうか、というものでした。これは当館にとって実に有意義なお話です。展示の機会についてはぜひ前向きに検討させてほしいと椎名氏に伝えました。

民芸館で大久保コレクションのファイルが目につ
まってからおよそ3年。今年度、ようやく展覧会を開
催する道筋をつけることができました。そして、あら
ためて大久保裕司氏の蒐集した品々とじっくり向き
合う時間も持つことができました。素朴な美しさを持
つ古唐津、越前、信楽等の陶器。精良堅固な朝鮮
時代の白磁や古伊万里の磁器。魔除けなどの呪術性
を伴う眩い色づかいの袖印や旗指物。卓然とした古
色と素直な形が心地よい茶^{ちや}罐や釜。素朴で愛らしく
健気に佇む数々の小石像。おもねり媚びない尋常な
る小さな仏像たち。身の回りの小物、什具など名も
なき工人の美しき道具類・・・見どころはいくつも見
出すことができます。この民芸館だよりが発行され
る頃には、特別展「或る賞鑑家の眼－大久保裕司の
蒐集品」は無事、開幕していることでしょう。

具眼の士、大久保裕司氏が心のままに求め、その元集まった骨董の品々は、私たちにどのような物語を語ってくれるのか、非常に楽しみです。

(都筑正敏)

我が師、大久保裕司について

さて、題名のように豊田市民芸館の都筑館長から、我が師、大久保裕司について書いてほしいと依頼を受け、どうしたものかと悩みながらこの文を書いています。

生前、師匠は「いろんな人の弟子がそれぞれの師匠について語っているが、どいつもこいつも自分を良くみせようとして、師匠を弟子の程度まで下げてしまっている、オマエさんはそんなみっともないことをするなよ、オレについて語る時は、自分のことを語れば自然にオレのことになる」と言っていたことを思い出しましたので、少し私のことを話すことで師匠を知ってもらおうと思います。

私が師匠を知ったのは浪人時代に通っていた美術予備校の講師の家に遊びに行った時でした。

その人の家で古いちゃぶ台の上で、萬古焼の急須と瀬戸の湯呑みでお茶をご馳走になり、かっこいいなあと思って、どこでどうやって手に入れたのか？と話したら「大久保さんという人のところに遊びに行った時に譲ってもらった」という話を聞きました。

その講師を拝み倒して師匠の家に連れていけと迫ったのですが「大学に受かったら連れて行ってやる」と言われ、兎にも角にも大学に入らんといかんと奮闘努力の甲斐あって、補欠とはいえ大学に受かったので、大久保さんを紹介してもらいました。二、三度遊びに行ったことで、すっかり古美術、骨董の世界に魅せられてしまった私は大学もそっちのけでバイト三昧で師匠と一緒にあちこちの骨董屋さんに行くようになりました。

師匠と出かけて感じたのは、買うと決断するスピードが異常に速いのです。骨董屋さんに行くと飾ってあるものをサーッと一瞥して、手に取ると「これとこれもうわ」と即断します、骨董市などでは本当に一瞬です。手にして値段を聞くと「もうわ、金を先に払うから包んでこいつに渡して」とスタスタ先に行ってしまうので、私は後ろから荷物を預かり追



古唐津筒盃

いかけていくのです。ある時、私が遅刻して骨董の販売イベントの会場入り口で合流し損ねたことがありました、15分後に「何やってたんだ！帰るぞ！」というので帰りましたが、20軒ぐらいのお店が出店していた会場を15分ほどで全部見て周り、平安時代の金銅仏を筆頭に、古唐津の皿や初期伊万里の盃などをいくつも買ってきたこともありました。

一緒に美術倶楽部の催事に行った時も本当にスタスタと見るような見ていないようなスピードで会場を歩き回り、ちゃんと好みのものは逃さずに入れていました。後ろをぐずぐずと追いかけていた書生の私は今でも一つのを手に入れるのにぐずぐずと悩んでしまいます。

反面、「これは！」と思ったものを手に入れるためにはじっくりと粘る人でもありました。ある古美術愛好家が所蔵していた籠を見て、欲しいと思った師匠は話に聞く限りでは10時間近く時間をかけて手に入れた話を聞き驚く私に、二日も経たずに「どんなものか解ったら飽きちゃったから手放した」と話を続け、さらに私は驚いたものでした。

他にも、古唐津の収集家が所蔵していたぐい呑みを手に入れたと思った時は、私が知る限り、五年近くかけて手に入れていました。手に入った時は、喜んで私を呼ぶので遊びに行きましたが、何やら師匠は浮かない顔です。私が「どうかしたのですか？」と聞くと「オマエに言っても解るまいが、どうにも納得できん」と2、3日悩んでいました。その後、納得できたようで、そのぐい呑みは晩年愛用していました。

さて、今回の展示の中に前述の平安時代の金銅仏や古唐津のぐい呑みをはじめ、私がお供した中で師匠が手に入れたものが色々と展示されています。

「買ったものは自分」とは大久保が良く言っていた言葉です、今回の展示を通して、我が師、賞鑑家大久保裕司の感性に触れていただけたら書生としてこんなに嬉しいことはありません、ぜひご来場ください。



金銅仏立像 平安時代

特別展「アイヌの美しき手仕事」作品紹介

「それは^{ただ}薔に美しいのみならず、立派でさえあり、神秘でさえあり、其の創造の力の容易ならぬものを感じるからである。見て見^み厭^あきないばかりでなく、見れば見る程何か新しい驚きを貰う。そこに出来不出来は^{しか}あろう。併し其の美に虚偽はないのである。不誠実さはないのである。」

1941年に日本民藝館で開催された「アイヌ工芸文化展」。ここに陳列された、杉山寿栄男（1885-1946）蒐集によるアイヌの工芸品を見た柳宗悦（1889-1961）は、「アイヌへの見方」（『工藝』106号）において文頭の言葉を述べ、高く評価しました。この展覧会以降、柳は本格的にアイヌの工芸品を蒐集、生前に約200点もの品々を日本民藝館のコレクションとし、また、「アイヌ工芸文化展」の選品と陳列を任された芹沢銈介（1895-1984）も85点の品々を蒐集しました。

10月12日より開催する特別展「アイヌの美しき手仕事」では、日本民藝館と静岡市立芹沢銈介美術館の所蔵品より、柳と芹沢の珠玉のアイヌコレクションを紹介、また、令和5年度に日本民藝館と当館に寄贈された高松静男コレクションもあわせて展覧します。そこで今回は、第1・第2民芸館で開催の「アイヌの美しき手仕事」の展示作品より、アイヌの工芸品について一部ご紹介します。

※引用文は、新字体・現代仮名遣いに改め、ルビを追加して掲載



オヒョウ地切伏刺繍衣裳（アハルシ） 丈107cm
樺太アイヌ
日本民藝館蔵

木綿地切伏刺繍衣裳 丈122cm
日本民藝館蔵

アイヌの衣裳や首飾りなどの装飾品、イクパスイや太刀、これらに使用される木綿や絹、漆、ガラス玉、太刀の刀身や金具などは、アイヌの人々が交易や労働を通して入手しました。

左の衣裳は、オヒョウという木の内皮繊維を糸に加工して織りあげた布です。オヒョウ、ハルニレ、シナノキなどの樹皮繊維で織られた衣裳は、北海道ではアットウシ、樺太ではアハルシと呼ばれ、日常着や晴れ着として使用されました。衣裳には、アイヌの人が集めた大切な木綿布が細いテープ状にして縫い留められ、さらにその土から刺繍が施されて模様が構成されています。右の衣裳は、明治以降に機織りが機械産業化され、広幅の布が生産されるようになってから作られたもので、衣裳全面に白布を置いて模様を切り出す技法で作られています。こういった木綿や絹の裂を地布に縫い付けた技法は^{きりふせ}切伏と呼ばれ、アイヌの衣裳の代表的な加飾技法とされています。また、切伏は背の中央、袖先、裾、襟などに施されます。つまり破れやすい場所を補強するために起こった技法で、まさしく用の美を体現するものだと感じられます。

写真左は生地質感に藍と水色の細かい模様が映えた凛とした衣裳で、右は際立った赤色と力強い模様に圧倒される衣裳です。ぜひ、展覧会場でその美しさを感じていただけたらと思います。

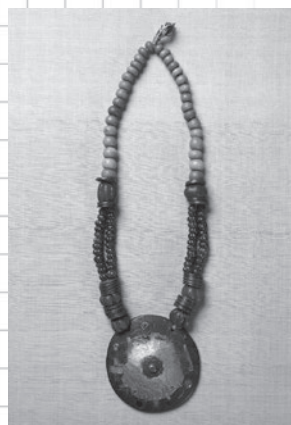


イukupasi

1 長さ33.6×巾3.0cm 2 長さ31.5×巾3.2cm 3 長さ29.6×巾1.8cm
4 長さ31.8×巾3.3cm 5 長さ38.0×巾2.7cm 6 長さ24.8×巾2.4cm

いずれも静岡市立芹沢銈介美術館蔵

北海道ではイukupasi、樺太でイクニシと呼ばれるこの道具は、アイヌの人々が儀式の際、カムイ（神）への祈り言葉や献酒に不足がないように補ってくれる力を持つ儀礼具です。この道具に施される文様には、幾何学模様から動物を象ったもの、木のコブなど天然木を生かしたものなど、多くの題材が見られます。また、左写真2・5・6のような漆塗りのものは、アイヌの人が彫りを施した後に、和人に漆を塗ってもらって制作しました。



首飾り（タマサイ）〔高松コレクション〕

左/長さ46.5cm 右/長さ49.0cm

いずれも日本民藝館蔵

大陸や本州との交易によってもたらされたガラス玉で制作した首飾りは、儀礼の際に女性が着用する装飾品で、代々女性に受け継がれました。写真右の首飾りはすべてガラス玉でできていますが、写真左の首飾りは、寛永通宝など和人の間で流通したお金とを組み合わせ、トップの部分に金属の飾り板（シトキ）を用いています。



刀掛け帯（エムシアッ・エムシタラ）縦195.0×巾（帯部分）14.0cm

太刀（エムシ・エムシ）長さ80.6×巾3.9cm

いずれも日本民藝館蔵

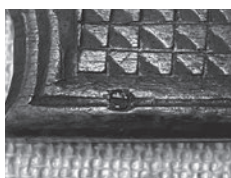
儀礼の際、男性は護符や宝物、魔払いとして、北海道や樺太でエムシと呼ばれる太刀用います。この太刀を肩から掛けては佩くのに、北海道でエムシアッやエムシタラと呼ばれる刀掛け帯が使用されます。太刀の金属部分は本州から伝わったものを用い、木製部分はアイヌの男性によって作られました。刀掛け帯は女性の手によるもので、オヒョウやイラクサなどの植物繊維を丁寧に編み込んで制作されました。

ここまではアイヌの人々が儀礼に用いた工芸品を紹介してきましたが、最後に、その細工の細やかさ、丁寧な仕事に魅了された、アイヌの女性が日々の暮らしの中で使った道具、糸巻を紹介します。



糸巻〔高松コレクション〕 縦9.3×横9.5×高1.2cm
豊田市民芸館蔵

表面・裏面ともほぼ同じデザインで、鱗のような文様が彫られています。糸巻としてよく見られる形状ですが、この糸巻には針入れが内蔵されています。3mmほどの楔^{くさび}を抜くと三角片の板が外れるようになっており、その奥には熱した火箸のようなもので開けられた穴があります。この穴は奥に7cmほど続いており、針を収納できる造りとなっています。楔をはめた上からも彫りが施されていて、その精密さには驚嘆するばかりです。（岩間千秋）



民芸の森から

○市民文化講座 青佳談義（第12回）

令和6年2月17日（土）参加者：39人

「民芸」や「本多静雄氏」について知りたい方、学びたい方を対象とした講座「青佳談義」を開催しました。

第12回目の今回は、杉本美術館で開館当初から学芸員を務めた鈴木威氏からお話をうかがいました。業務を通じて目の当たりにした、洋画家の杉本健吉氏と同氏の作品を展示していた杉本美術館で初代館長を務めた本多氏の両氏にまつわる様々なエピソードをお話しいただきました。



○初夏、森の手ざわり

令和6年5月19日（日）参加者：約500人

今年は「新緑の森で風を感じませんか」をテーマに、NPO 法人民芸の森倶楽部と共働で開催しました。

狂言舞台での杜若高校による吹奏楽やダンス、ウクレレに合わせたフラダンス、敷地内の各所での民芸品の展示、食品や民芸品の出店などを行い、地域住民の交流や憩いの場となりました。



○森のアート展 Vol.20「水中ごっこ 川澄綾子展」

令和6年1月20日（土）～3月17日（日）

20回目の森のアート展はVol.18に続き公募により選ばれた作家の展覧会になります。選ばれたのは豊田市出身の工芸作家・川澄綾子氏。

彼女は、和紙や漆を使った作品を制作し、豊田市内を中心に展覧会等を多数企画されています。

今回の展示では、タイトルの「水中ごっこ」という、作家の幼い頃の遊びを和紙のインスタレーション（田舎家の畳間、広縁窓ガラスに設置）で表現し、和紙の作品に近づいて、体験し、幼い時の遊びの感覚や気配のようなものを体感してもらう展示を行いました。



○森の本多コレクション展「本多静雄の眼」

令和6年4月4日（木）～6月16日（日）

本展は、民芸館敷地内にあった本多記念館を令和6年4月から民芸の森へ移転、再構築した記念に開催しました。

日本を代表する古陶磁研究家で、名古屋民藝協会の会長でもあった本多静雄氏。本多は1990年、93歳の折、これまで民芸に関して書いた随筆やエッセイ、講演の手記などをまとめて、書籍『民芸彷徨』（矢作新報社発行、1990年）を出版しました。本展では、本多が収集し豊田市に寄贈された資料の中から、やきものや漆器などの国内外の民芸品約15点を選定し、自著『民芸彷徨』のなかで語られた言葉とともに紹介しました。



令和5年度事業報告

民芸館年間入館者数

民芸館年間入館者数
56,988人（312日開館）
（4年度 46,338人／310日開館）

特別展・企画展

特別展3回、企画展1回開催しました。
各展覧会では、ギャラリートーク、体験、講演会などを開催しました。

◎特別展

「全国の郷土人形－祈り・願い・美しさのかたち」 （第1・2民芸館）

会 期 1月21日～5月7日
入 館 者 1,234人
（令和5年度分32日間）
関連企画 講演会、土人形絵付け
実演・体験、関連グッズ販売



◎企画展

「柳宗悦と愛知の民芸」 （第1・2民芸館）

会 期 7月1日～9月24日
入 館 者 6,823人（80日間）
関連企画 ギャラリートーク、
特製和菓子提供、関連グッズ販売



◎特別展 *日本民藝館からの巡回展 「沖縄の美」

（第1・2民芸館）
会 期 10月7日～12月3日
入 館 者 2,941人（51日間）
関連企画 講演会、琉球獅子舞・
エイサー演舞、関連グッズ販売、
特製和菓子提供



◎特別展

「河井寛次郎展－寛次郎の魅力は何ですか－」 （第1・2民芸館）

会 期 12月16日～3月10日
入 館 者 6,434人（69日間）
関連企画 講演会、茶会、
トークショー、ギャラリートーク、
ワークショップ、関連グッズ、
書籍及び図録販売



民芸館講座開催

定例の講座と団体利用による出張講座を行いました。

【講座参加者数】

[連続講座]

穴窯陶芸教室	参加者数	91人
ガス窯陶芸教室	参加者数	439人
染織教室	参加者数	281人
絞り染め教室	参加者数	225人
挙母木綿教室	参加者数	587人
トンボ玉教室	参加者数	354人

[体験（親子・成人）466人]

ガス窯9回 穴窯陶芸2回 トンボ玉2回
糸紡ぎ・機織り2回 絞り染め2回 裂織2回

【団体 利用件数・参加者数】

ガス窯陶芸2件 絞り染め3件 そば猪口絵付1件
染織1件 呈茶1件 見学1件 合計316人

【民芸体験・参加者数】

穴窯陶芸、狛犬づくり、土人形絵付け、しめ縄作り
計10回・121人

イベント

[平戸橋桜まつり]

4月1日（土）
民芸館、民芸の森、いこいの広場で開催
来場者 7,000人

刊行物

「民芸館だより」第35号・第36号
図録「河井寛次郎展－寛次郎の魅力は何ですか－」
B5変形版 95頁

資料収集

紅型風呂敷、格子着尺、樺細工散し皮縦貼茶筒購入。
石皿、和紙、甕、アイヌ民具、ざぜち、とんぼ玉な
どの寄贈。令和6年3月末で収蔵資料数は12,264件
59,003点となりました。

民芸の森

年間入館者数 18,352人
イベント／初夏、森のてざわり5／21、
観月会10／28、勘八峡紅葉ウォーキング11／18
体験ワークショップ／「貼り絵でミニ鯉のぼりを作
ろう」ほか8回
森のアート展／「山口百子 白南風～白露」ほか
2回

民芸館からのお知らせ

① 豊田市民芸館 年間パスポート発売中

民芸館の展覧会をお得に楽しむことができる年間パスポートを販売しています。有効期限は1年間、今秋開催の特別展「アイヌの美しき手仕事」(一般800円)など、豊田市民芸館主催の展覧会を期間中何度でもご覧いただけます。

販売価格: 1枚(1名様) 1,500円

※ご利用はパスポート裏面に署名したご本人に限ります。

有効期限: 購入日から翌年の発行日の属する月の末日まで

申し込み: 第3民芸館受付にて直接申し込み

また、豊田市民芸館・豊田市博物館・豊田市美術館の3館の展覧会をご覧いただける共通年間パスポート(6,000円)を、当館では10月1日(火)より販売します。詳細は決まり次第ホームページ等でお知らせします。



② キャッシュレス決済ご利用いただけます

当館ではキャッシュレス決済の対応を進めています。現在ではクレジットカード、交通系ICカード、バーコード決済がご利用いただけますので、展覧会の入館料や販売物、講座受講料等のお支払いにご利用ください。

③ 特別展「おいしい民窯一食のうつわ」を開催します

期間: 令和7年1月11日(土)～5月25日(日)

場所: 第1、第2民芸館

「民窯(みんよう)」とは、一般民衆が日々の生活のなかで使う器や道具などを焼く窯、またはそのやきものの自体を指します。日本民藝館の創設者・柳宗悦(1889～1961)は「普段使い」「下手物」といわれるものの美しさを具体的に示すために、皿や碗などの食の器を取り上げて紹介しました。また、柳家の食卓では、民藝運動を共に牽引した盟友・河井寛次郎や濱田庄司によるうつわが使われていました。今回の展示では、愛知県の瀬戸焼をはじめとした全国の民窯のやきもの、河井・濱田による食のうつわや日本民藝館展の入選作品を含めた現代の職人の手仕事によるものまで、当館が所蔵する食にまつわるやきものを紹介します。



お問合せ 豊田市民芸館

〒470-0331 愛知県豊田市平戸橋町波岩86-100

TEL 0565-45-4039 FAX 0565-46-2588

休館日 月曜日(祝日の場合は開館)

開館時間 午前9時30分～午後5時

入館料 無料(有料展あり)

<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>

豊田市本多記念民芸の森

〒470-0331

豊田市平戸橋町石平60-1

TEL 0565-46-0001

